

ともに猟に行く犬は、猟犬を改良した犬を子犬から育てるのが一般的で、他の先輩犬と一緒に猟に連れて行き、狩りの方法を覚えさせます。親の性格や特徴、犬自身の性別によって狩猟への適性が異なります。優秀な犬は獲物の臭いをいち早く嗅ぎ付け、それを辿って森の奥まで入って行きます。私たちは犬の鳴き声や鈴の鳴る方向、GPS 発信機等で犬の位置を把握し、他の猟師のいる方向に追い立てたり、先回りをしたりするなどの連携を行って狩りをします。犬は狩猟のための道具ではなく頼もしい仲間。この子たちがいないと猟は始まりません。



GPS アンテナと発信機
首輪に付けられた
GPS 発信機と鈴



複数頭で狩猟する場合は
犬同士の相性も重要

頼もしい相棒



吾平町猟友会
【さかした かずお & くら】
坂下 一夫
& クロ

次代の担い手



鹿屋市猟友会
【よこた もとき】
横田 基樹 さん

40 歳になった頃に何か始めようと思い、銃砲所持許可を取得してクレー射撃を始めました。クレー射撃をしている人は狩猟免許を持っている人も多く、射撃場でその方々の話を聞いたのが、狩猟に興味を持ったきっかけです。祖父や父が狩猟免許を持っていたことも影響したかもしれません。銃の所持に関しては、3年に1回の許可証更新や身辺調査、そして銃本体の保管・メンテナンス・弾の購入など、大変なことも多いです。しかし、自分の計算したところに弾が飛んでいったときの喜びや、自然の中に身を置きながらゆっくりと過ごす時間は、街の中では得られないものだと思います。

「猟友会」は銃・罠での狩猟免許を持ち、狩りや有害鳥獣捕獲等を行う団体です。自分の田畑を守るために入会した人や、私のように親や親戚の影響で資格を取得したメンバーもいます。

自主的な狩猟活動のほか、市や農家からの依頼によって捕獲に向かいます。「出動したらお金をもらえる」といった誤解をよく聞きます。しかし、捕獲した鳥獣に対して買上金は支払われますが、出動に対してのお金はありません。その買上金も、銃の弾や猟犬の飼養経費、狩猟税等を考えるとプラスにはなりません。

それではなぜ、ほとんどボランティアといった状態で有害鳥獣の捕獲などを行うのかと聞かれると「困っている農家の方々に助けたい」という思いがあります。「丹念に育てたサツマイモを収穫前に食べられる」

従来、行政区域を越えた狩猟は困難でした。しかし、動物たちに人間の線引きは関係ありません。追い払った動物たちは隣接した町に移動するだけで、そこで被害を引き起こします。そのため、近くの猟友会と協力してイノシシの広域捕獲を実施しています。

しかし「有害鳥獣対策」猟友会ではありません。農家さん自身が電気柵や対策器具の設置などを行ったうえで、被害があった場合に私たちが出動する、といった形が理想です。

一時は約100人いた南部猟友会も、高齢化等によって30人ほどになっていきます。今後は新規入会者の確保や、新たな捕獲方法の導入などに取り組むたいと考えています。

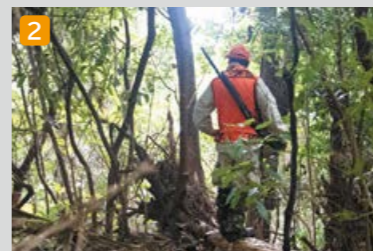
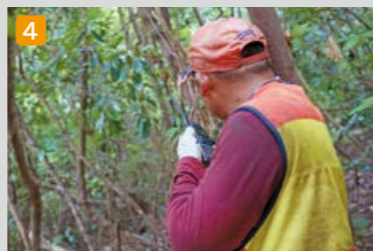
農家、猟友会、地域や関係団体、行政、それぞれにできることは限りがあります。個々で対応するのではなく、みんなで一丸となってお互いに頑張ることで被害の減少を目指しましょう。

猟友会について

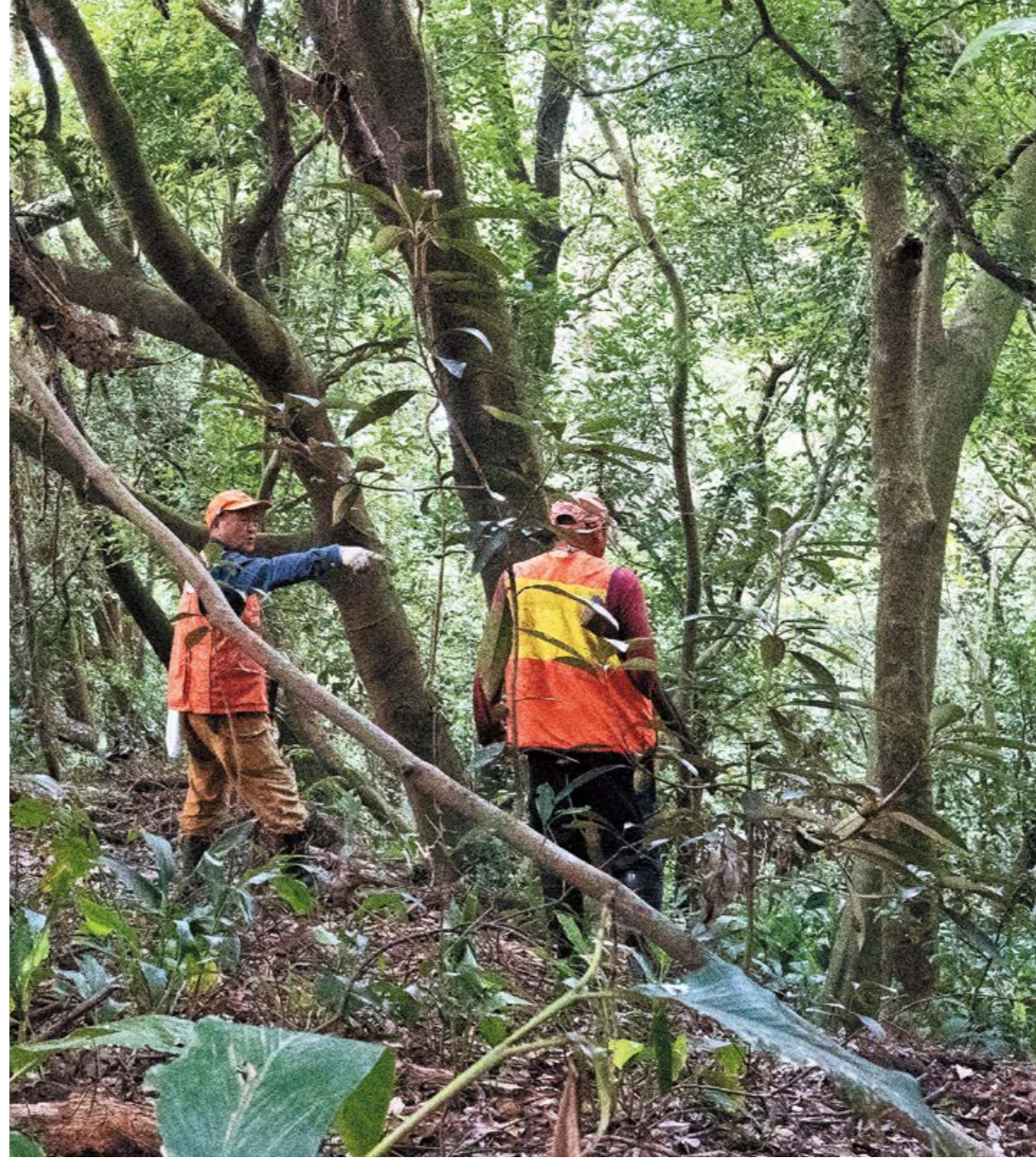


南部猟友会
【いわまつ かずちか】会長
岩松 和近

1 住民への聞き込みやイノシシの足跡などの痕跡から、隠れている場所を特定。2 イノシシがいると予測した範囲を囲むように「待ち」役を配置。3 「勢子」役が猟犬と入山。犬たちと協力しながら「待ち」のいる方向へとイノシシを追い立てる。4 事故が起こらないように無線やGPSを使ってこまめにお互いの位置を把握する。5 イノシシが見つかったら銃に弾を込める。銃口の向きや、少しでも移動する場合は弾を抜くなど銃の管理は徹底する。



密着
有害鳥獣捕獲



鹿屋市には鹿屋市猟友会、南部猟友会、吾平町猟友会、串良猟友会、百引猟友会、市成猟友会の6団体に231人のメンバー（令和5年4月1日時点）が所属しており、パトロールや捕獲活動を行っています。

猟友会

